

第2回準備会における主な意見等(案)

【委員発表要旨】

(アントレプレナーシップ関連)

- 意志さえあれば、新しいアイデアや新しいチャレンジが受け入れられやすい時代であり、あらゆる面で教育のチェンジが求められている。
- グローバルな活動とは、新しいものを獲得していくような活動であり、対してローカルな活動は、地域に埋め込まれているものを改めて自覚し、それを大切にするこゝである。京丹後市出身者として、これらの活動をあわせ持てる人材がグローバルリーダーと言える。グローバルリーダーを駆動させるエンジンにあたるものがアントレプレナーシップであると認識している。
- 需要と供給を取り持つ、問題と解決策を取り持つ、あるいは異分野のアイデアなどを組み合わせて新しい分アイデアを生み出すといったような、異分野、異なる地域を橋渡しし、世の中を良くしようとする思考行動の在り方がアントレプレナーシップであり、アントレプレナーシップが備わっていれば、起業しなくても課題解決に寄与できる。
- 教育分野への反映としては、小さな一歩でもいいので、醸成と発揮をセットで行うことが大事である。それによりアントレプレナーシップ活動が面白い、社会とかかわることが増えて大変だ、解決策を考えることは結構大変だなど、いろいろな気づきにつながるということが重要である。
- 京丹後市をベースに考えた場合、強み・活かせるソースとしては、京丹後市特有のちりめんなどの伝統的産業、あるいは観光等の復興が予測される産業に加え、高校の専門科が結構あるため、小中学生の巻き込み先として高校の専門科が連携しやすいのではないかと感じる。また、グローバルやデザイン思考等のプログラムで育まれているので、連携できることが多々あるのではないかと。
- 地理的な制約をオンラインとのハイブリッドや、ある種学びの市町間で遠隔地同士の連携ができないか。また、地域プレイヤーの持続可能な巻き込みという点では、善意に頼り続けるということだけではなくて、例えばアントレプレナーシップで言えば年齢に関係なく、小学生から高齢者まで学べるオープンスクールのような場を作るのもおもしろいのではないかと。

(地域との連携関連)

- 都道府県立高校と地域、市町村の連携協働が必要である。教科の中の学びだけでなく、それと社会とのつながり、地域を窓にして社会や世界とつながっていく、学んだことを社会で実際に活かしてみる、いろいろな体験をしてもっと学ぶことが

必要だと感じて教科の学びに帰ってくるといった循環を引き起こしていくことが重要である。

- 同質性の高い集団だけだとなかなかそういった気づきが起きにくいですが、異質性を取り込むことで、越境していく、もしくは越境生を受け入れていくということがうまくいっているところに共通するポイントである。そのためのコーディネートする人材や、それを仕組みとしてやっていく体制づくりということがポイントになってくる。
- こうした取組をカリキュラムレベルでしっかりとやってくためには、口だけ出して学校に押し付けるだけでなく、ある程度組織対組織の連携協働が必要になってくる。
- 地域資源のことも知っているし、現場の声を聴き柔軟で機動的に取り組みやすいのは、都道府県よりも市町村である。都道府県と市町村のそれぞれの強みをハイブリッドで組み合わせた学校運営の形態というところをもっと柔軟に活用していくというのはこれからの1つの在り方ではないか。都道府県立の学校で、運営の一部を市町村が運営していく、寮の部分を運営するとか、もしくは学校の運営自体を市町村がやるとか、新しい時代の学校の在り方を考えながら、議論することが大切である。

(GIGA スクール関連)

- 従来、タクト(イニシアチブ)を先生が持ち、振っている授業を多く見るが、GIGA スクールでは、子どもたちがイニシアチブを持ち、自分が発表して先生がそれを上手に捌くという授業が起り始めている。
- 例えば、デジタル教科書に付属している動画や YouTube の動画を授業の中で活用し、今日の授業の流れを伝えることで、子どもたちはこれから自分たちがどういう手順で学ぶかを理解することができる。動画の後、授業が始まると、子どもたちは問題を解く手順が分かっているので、必要な学習材を手にとって勉強し、わからない場合は自分で動画を見たりインターネットで調べたりする。
- クラス全体としては、自分のペースで学びたいという子は真ん中で学んだり、得意な子に教わりに行ったりということが教室の中で起こる。ぼうっとしている子は一人もおらず、授業が終わると、子どもたちにはポジティブな疲労感が見受けられる。
- クラウド上で考えの共有をすることもでき、他人が今何をしているということや、自分より上手にまとめたということが分かる。自分の考えを表出していくことができるため、挙手で指名された子だけでなく、全員が発言するので達成感があり、全員がイニシアチブを持っている状態になる。
- 学習の長期記憶においても、テストによるトレーニングだけでなく、ディスカッションをし、体験を自分のものにすることで忘れづらくなることがあるため、アクティブ

ラーニングが効果的である。

- 細かい指示を多くすると、シングルな作業はできるが指示を待つチームになる。しっかり自らが考え仲間同士助け合うようなチームをつくる教育を、GIGA スクール、文部科学省の「個別最適な学び」は目指している。これを京丹後で行い、京丹後で学べばイニシアチブを自分が持っている子どもたちが思えるような教育にしていきたい。

【自由討議等】

- 地域以外の「資源」は限定的であり、地域内の「資源」は豊富であるが十分活用できていないとなっているが、それらの「資源」が具体的に何をさして、なぜ限定的で、十分活用できていないのか。また、それを ICT の活用で解決できるのかを検討するとよいのではないか。
- 緯糸の「地域の良さを域外に発信」や「STEAM 教育、アントレプレナーシップ教育」を京丹後市の経糸「地域の良さの理解」「地域資源の活用」によって、中身を組立てて京丹後市ならではの方向性を見出すのがよい。
- 子どものころからデジタルに慣れ親しんだ若者が、新しい発想や機械を駆使して技能を継承して発展させることが、これからの製造現場の大きな目標であり、丹後地域だけでなく日本のモノづくりの課題だと感じている。
- 丹後ならではの自然にもっと触れて学べる環境や、オーケストラやジャズ、落語、映画等芸術鑑賞の機会を増やし、印象に残るような学業の時間があるとよい。
- 子ども達が丹後に帰ってきたいと思えるような教育と環境が必要である。教育が充実しても、一度進学等で市外に出た子ども達が再び京丹後に帰ってきたいと思える環境作り(職場・娯楽等)もセットで考えていく必要がある。

(以上)